

Book Review



顎関節症 運動療法ハンドブック

顎関節症 臨床医の会 編



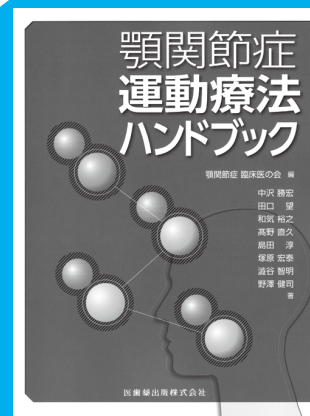
Reviewer

高橋 哲 Tetsu Takahashi

(東北大学大学院歯学研究科

口腔病態外科学講座顎顔面・口腔外科学分野)

A4 判変, 88 頁
定価 (本体 6,000 円+税)
医歯薬出版刊



顎関節症の本態は、筋骨格系の運動障害である。したがって初期の理学療法、とりわけ運動療法はきわめて重要であることは論を待たない。しかし筆者を含め、顎関節症に携わっている多くの歯科医師はこれまで運動療法にあまり積極的ではなかったのではないだろうか？ 顎関節症の保存療法というと、まず消炎鎮痛薬を出して、スプリント療法、そして経過観察、といった治療が中心であったように思われる。

顎関節症に対する考え方は近年大きく変わりつつある。本書にも詳しく書いてあるのだが、顎関節症は臨床症状が類似した病態の、異なる幾つかの包括的疾患名であり、まずは可逆的な保存療法を優先させるべきで、咬合調整などの非可逆的な治療は禁忌というのが世界の共通認識になっている。わが国でも顎関節症の分類はこれまでの症

型分類から病態による分類に大きくシフトした。

このような顎関節症をめぐる潮流のなかで、顎関節症で困っている患者さんを前にして、臨床家としてまずどのように症状を改善し、状態を安定させるか、その初期の対処法である理学療法、特に運動療法の原理と実技について本書『顎関節症 運動療法ハンドブック』には詳しく記載されている。実際の手法は写真を用い、ステップごとで解説しているので大変わかりやすい。運動療法は「筋肉内のトリガーポイントをストレッチし、運動制限の解除を目指す。顎関節においては、関節空隙を広げ、その段階で開閉口運動を行わせることで滑液を循環させ、空隙内の発痛物質などのサイトカインを新しい滑液で洗い流すことを目的とする」(49 頁)。顎関節の運動療法の本質を

捉え、治療のコンセプトを的確に示した実にエレガントな一文である。

本書の著者は“顎関節症 臨床医の会”のメンバーたちである。彼らはいずれも臨床家でありながら顎関節症にきわめて造詣の深い、日本の顎関節症治療のトップランナーの方々である。したがって本書に示されている個々の症例に対する報告はどれもきわめて実践的で参考になる症例ばかりである。また第Ⅴ章の“まとめ”は病態別の運動療法の選択と、療法別の実際の手技が整理されていて実にわかりやすい。最後に付録はコピーをして使えるようになっており、それぞれの運動療法が一目でわかるので、机の前にでも貼っておくと便利である。顎関節症を治療する臨床家には明日からでも使えるハンドブックとして貴重な一冊となるであろう。